

この点についてもなお一層研究を續行するつもりである。

引用文献

1. 石川県立農事試験場：稻泥負虫の研究成績。

昭和9年8月。

2. 池屋重吉・小島由雄：稻葉潜蠅と稻泥負虫。北陸農業雑誌，第5号，昭和24年。

3. 加藤陸奥雄：イネハモグリバエとイネドロオイムシの生態と防除。農園，第26巻第1号。

(石川県立農事試験場)

螢光灯の1比較法

高木 信 一

従来圃場に併立して誘虫力を比較する機会が多いが、たとへ毎日その位置を變換するとしても充分能力に差がない限り本當の比較は出来ない。その理由は作物が時間的に又位置的に變化する事と、毎日の氣象が決して同じでないからである。

此處に環境的一化の方法として廻轉が考えられるのであるが、一応次の様な欠点が考えられる。

1) 多くの灯を近距離に設置するのであり、2~3分で1廻轉するのであるから、虫がその意志(?)に反して隣の灯に飛び込む恐れがあるのではないか。

2) 集團灯として1次の光源として作用し、次に第2次の光源として作用するから、低能力のものも比較的有利に働く事になるのではないか。

3) 以上の外配光、亂殺的の虫の飛込み等が考えられる。

1) については若し隣灯に惹かれる量との間に

差があれば必ず何か差が出る。虫毎に固有の分散を調査しておけば後から計算に依り補正が出来る。余が2化螟蛾に對して行つた廻轉の早さは2化螟虫級では丁度良く、キリウチ級には早すぎ、ガムシ級には遅すぎる様に見える。

2) の問題は密度の問題に歸着する。

3) 配光の問題は空間に何か被照体を假設して考えている場合の外、實際的には問題とならない。亂殺的飛込を考えるなら廻轉に依り各灯の誘殺数は等しくなる筈。(現實に反する)。

以上の理由から廻轉式の螢光灯比較法は合理的と考えられるが、60w白色電灯との比較に於て計算値は従來の價に極めて近いものとして現わされて来る。尙スペクトロメーターに依つて分光寫眞を撮り新潟縣に入つている9種類について検討した結果も廻轉式の成績を裏書きするものであつた。

(新潟縣立農業試験場)

昭和25年度新潟縣に於けるイネキモグリバエの発生

藤 卷 正 司

1950年度新潟縣に於けるイネキモグリバエの発生は岩船郡、北蒲原郡、並に西頸城郡を除く各地に多く激發した(被害程度は新潟農試1950年度育

虫害発生程度表示基準による)。本虫は新潟縣に於ても3化性が認められ、その羽化最盛期は第1化期5月18~20日、第2化期7月17~21日、第3